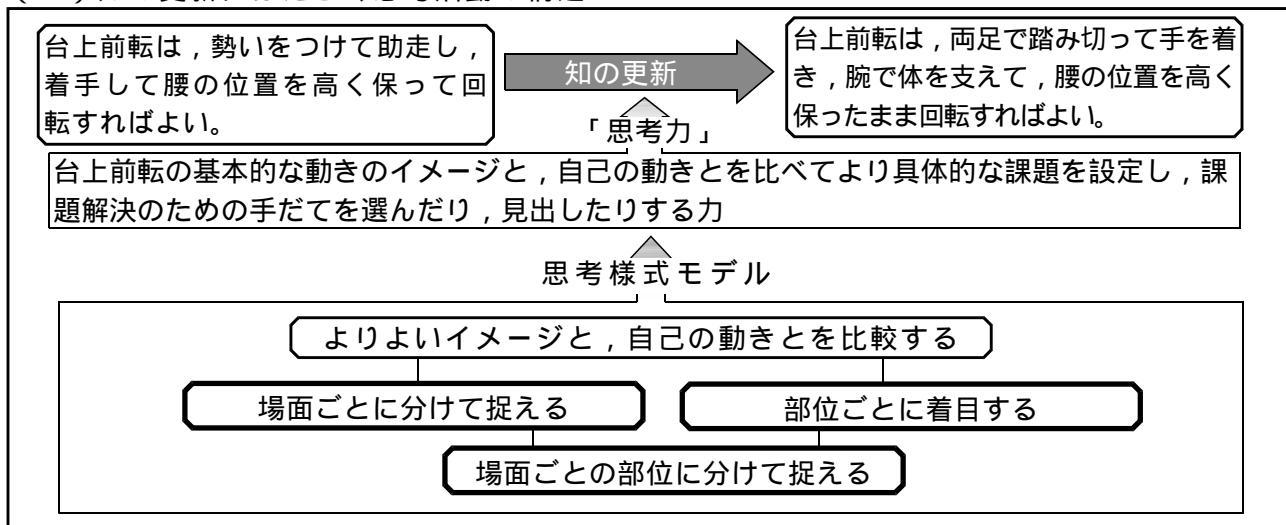


#### 4 言語活動を充実し、思考様式を顕在化する学習指導の実際

### 「みんなでチャレンジ 台上前転」(第4学年)

#### (1) 知の更新にはたらく思考活動の構造



上記「知の更新」は、台上前転を成功させるためには「勢い」が必要であるという認識から、台上前転の基本的な動きのイメージと、自己の動きとを比較して課題を設定し、解決のための手だてを見出していくことによって図られる。そのため、本実践では「場面ごとに分けて捉える」「部位ごとに着目する」という思考様式を習得・活用するとともに、それらを併せて捉えることができるようにする(思考様式モデル参照)。そうすることで、自己の課題を的確に捉えることができ、その後の課題解決の活動へとつながると考えたのである。

#### (2) 思考活動を促す開発教材

自己の動きの分解図と、台上前転の基本的な動きとを比較して自己の課題を見出す学習

適切な課題を設定するためには、自己の動きを的確に捉えることが必要である。しかしながら動きは複雑で消えてしまうため、自分自身の動きを捉えることは難しい。そこで、自己の動きを正確に捉え、課題をより具体的に設定することができるよう、個々に自己の動きの分解図(静止画による動きの連続図)を配布し、自己の動きと台上前転の基本的な動きとの比較を通して課題を明確にし、解決につなげていく学習を設定した。

#### 「言語活動の充実」の視点から

本実践では、自己の動きと基本的な動きとの比較を通して台上前転における課題を見出すことを目標とした。子どもたちは「助走の勢い」が演技の成否を決めるという意識が強いことから、実践前に「助走の勢いは必要かどうか」の検証を行い、台上前転に「助走の勢い」は必ずしも必要でないということの共通理解を図ることとした。そうすることで、本時の集団吟味において、達人のインタビューから「着手」や「体の開き」等、より重要性の高い部位に焦点化して集団吟味を進めることができると考えた。

#### 「思考様式の顕在化」の視点から

子どもたちは、分解図によって自己の現実が細かく示されることで、うまくできていないことに気付くことができる。しかし、どうしてそこがうまくできないのか、またその原因はどこにあるのかまでは気付いていない。その中から「うまくするためにはどうすればよいのだろうか。」という反応を核とし、「場面ごとに捉える」「部位に着目する」という思考様式を顕在化させ、それらの2つを組み合わせた「場面ごとの部位に着目する」思考様式を導き出していくのである。

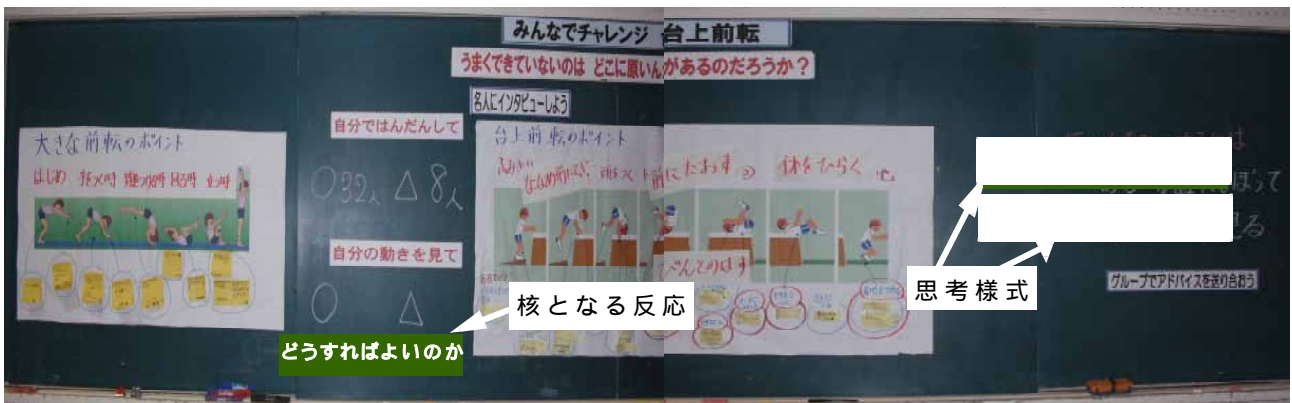
(3) 学習指導の実際

授業の概略

< 本時の学習指導 >

学 習 活 動	思考様式の顕在化につながる主な反応
うまくできていないのは どこに原因があるのだろうか？	
1 モデル図と自己の動きとを比較する。	<p>モデル図と比べてみればうまくいっていないところを見つけることができるよ。</p> <p>ちがっているところがあるけれど、うまくできるようにするには、どうすればよいだろうか(核となる反応)。</p>
2 台上前転の達人にインタビューし、新しいポイントを見つける。 < 思考様式を顕在化する言語活動 >	<p>何か気をつけていることはありますか？</p> <p>あごを引いて頭の後ろを跳び箱に着けて回れば、すような感じで着地すればうまくできる(思考様式の顕在化)。</p> <p>着地をする前に、足を下におろす</p>
3 達人の言葉を基に、自分の課題を探る。	<p>できていない箇所に絞って、ポイントでの動きを試してみよう。</p> <p>僕は頭の上に着いて、スムーズに首・背中まできちんと着いていなくて、着地で落ちているのは、手を着く位置が悪いのかな。</p> <p>回れていないよ。だからあごを引くことできていないのかな。</p>

< 本時の板書 >



「思考様式を顕在化する言語活動」の詳細

みんなが認めた「台上前転の達人」に、動きのポイントやどのようなことに気を付けているのかインタビューし、そこから思考様式を顕在化させる言語活動

子どもたちに「台上前転がうまくできているか」自分自身で判断してみるようたずねたところ、多くの子どもが「うまくできている」と判断していた。そこで、個々に台上前転の分解図を配布し、基本的な動きと比較させたところ、これまでとは反対に、多くの子どもが「できていない」と判断を変更した。その理由をたずねると「基本的な動きとちがうところがあるから」「きちんと着地ができていないから」と、分解図から見られる動きのずれを根拠にしていた。

さらに、どうしてそうなったのかその原因までたずねると、応えられない子どもが多かった。子どもたちは分解図との比較によって、うまくいっていない場面を明らかにすることはできて、その原因は何なのか、どうすればうまくできるのかまでは捉えることができていなかった。

そこで、台上前転の達人（子どもたちがうまくできていると判断した者）に演技を披露してもらい、その後達人に質問する時間を設定した。すると次のような反応が出された。

A児：どうすれば最後に足をそろえて立つことができるのですか？

達人：着地をする前に、足を下におろすような感じで着地すればうまくできます。

B児：どうすればそんなに腰を高く上げることができるのですか？

達人：助走で勢いをつけるよりも、踏切の時に強く踏み切って手で体を支えればいいです。

A児やB児の質問は、分解図から自分ができていない場面を見つけ、どのようにすればうまくできるかというものであった。それに対し、達人から「着地をする前に」「踏切の時に」という反応が出された。実際、着地に関して説明する時には、着地の場面よりも少し前の場面を取り上げて、動きの工夫を説明していた。この達人の反応から、うまくいかない原因を探る時には「場面ごとに分けて見る」という思考様式が顕在化され、教師は黒板に明示した。



【電子ボードを用いて動きを説明】

C児：前転をしている時に横に落ちてしまうのはどうすればいいですか？

達人：あごを引いて頭の後ろを跳び箱に着けて回れば、まっすぐ回れます。

C児の質問に対して、達人は自分の動きの一場面を取り上げ、その中でも特に首の後ろが跳び箱についていることが大切であることを電子ボードに書き込み強調した。この反応から「場面ごとに分けて見る」だけでなく「体のある部分を見る」ことも大切であることが明らかになり、この2つを併せた思考様式が顕在化された。

#### （４）検証データを通して

本実践の前後でテスト（6点満点）を行い、「思考力」の伸びを検証した。その結果、平均値で0.3点の向上が見られた。この差についてt検定を行ったところ、有意差が見られた〔 $t(39)=2.68, P<.05$ 〕。一方、実践直後と1か月後のテストの結果を比較したところ、平均点は0.1点減少し、これは5%有意であるという結果になった〔 $t(38)=2.36, P<.05$ 〕。

これらのことから、本実践を通し「思考力」の向上は図られたものの、その定着は十分ではなかったと言える。

#### （５）考察

自分が困っていることを達人にインタビューすることによって、思考様式を顕在化することができ、自己の課題や課題解決の手だてを見出すことができた。インタビューする言語活動に必然性を感じ取ることができたようであった。また、課題解決の手がかりを見出す視点として「うまくいかない原因を探る際には、それよりの前の動きに着目すればよい」という視点も新たに見出すことができた。この新たに見出した視点と、今回設定していた思考様式モデルとを組み合わせることで、「思考力」を育成することにつながるのではないかと考えられる。

一方で、本時は課題を見出すだけでなく、アドバイスを送り合う活動を通して課題を解決していこうとしたが、それらの活動が子どもにとって必要感をもったものにならなかった。体育の授業にとって大切なアドバイスを送り合う活動を充実させるためには、子どもにその必然性をもてる場を設定することや、交流の目的や意図を明確につかませておくことが必要であることが明らかとなった。



